

伊藤祐二 (作曲家)

ユージ 芹に
気をつける

コンボージアム'23より

①5月23日「フィルム&トーク」(東京オペラシティリサイタルホール)、②25日「近藤譲の音楽」(同・タケミツメモリアル)、関連企画として③26日「近藤譲室内楽作品による個展」、④30日「近藤譲合唱作品による個展」(同・リサイタルホール)

この5月は東京で、作曲家近藤譲の大規模な特集となった。素晴らしいことだ。

①は、ハウケ・ハーダーとヴィオラ・ルシエ制作の、近藤譲を描くドキュメンタリーフィルム。制作者が近藤譲に寄せる親しみと敬意が基調となった、とても美しいフィルム。(ハウケは、非常に興味深い作曲家でもある。)②は、主にオーケストラ作品特集。ピエール・アンドレ・ヴァラド指揮、読売日響、国立音大CIアンサンブル。明快かつ熱量のある演奏を楽しむ。そして、感慨深かった。というのも、近藤譲が「昔、オーケストラ作品初演の折、楽団員に楽譜を投げつけられた」と語るように、嘗て彼の音楽は理解

されなかつた。しかも頭脳明晰な彼は、日本的な「曖昧な同意」をせず、「僕は、そうは思わない」と切り返す。昔の彼は、触ると手が切れそうな人だった。だから、この日の演奏者達がアプローズする姿は感慨深いものだった。

ところで私は曲を楽しんでいて、ふと、なぜかその響きに権力性のようなものを感じ、終演後に彼にそう言うど、馬鹿なことを、という顔をされた。当然だが……

③④は、関連企画として、石塚潤一氏が制作したもの。石塚氏のプロデューサーとしての貴重な仕事に敬意を表したい。④は合唱作品特集。西川竜大指揮、合唱団「空」「曉」「ヴォクスフマーナ」。安定した美しい演奏だったが、これは私自身の欠点で楽しみきれなかつた。自分の持つ詩の感覚に引きずられ、近藤譲の音楽と軋みを生じてしまうのだ。詩と音楽は、つくづく難しい。

③は室内楽特集。(出演者多数のため省略。)スレッドベア・アンリミテッドは、四十年以上前の初演を聴いて魅了されたので再演を聴くのが楽しみだ、と隣席の作曲家田中聰に話すと、あの時は、お客さんがほとんどいなかっただね……と。そう、感慨深い……。そして再演で

もやはり魅了された。しかし一方で、演奏に問題を感じる曲も。デュオの二曲は、奏者がその曲の理解に確信を持ってぬまま演奏しているように、私には、聴こえた。「デニス」が詠った三篇は素晴らしい曲だが、ソプラノ歌手がアンサンブルと音量勝負せざるを得ないような曲ではないし、「時の柱」は、聴いていて、すこぶる居心地が悪く、残念だった。どんな現代作品も、古い音楽を継承している側面と、新しい試みをしている側面があり、その継承面を強調する演奏はあり得るが、それは、その作品が持っている継承性の面を引き出すという事であつて、指揮者、演奏者の持つている古い音楽解釈、古い音楽的身体性で現代作品を演奏してしまう事とは全く異なる。

理解されなかつた近藤譲作品が今日、受け入れられ、親しまれるのは感慨深く、素晴らしい事だ。しかしだからこそ、その作品を大切に、よく読み、時間をかけて磨いた演奏を聴きたいと思う。そして我々作曲家は、近藤譲をリスペクトしつつも批判し、乗り越えることを志向することにこそ希望がある。近藤譲から引き継ぐべきなのは、「僕はそうは思わない」と切り返す態度なのではないだろうか。